

京都大学人文科学研究所共同研究実績・活動報告書

(3 年計画の 1 年目)

1. 研究課題

環世界の人文科学——生きもの・なりわい・わざ

The Studies of Umwelten: The Lives and Lived Worlds of Human and Nonhuman Beings

2. 研究代表者氏名

大浦康介

Yasusuke OURA

3. 研究期間

2015 年 04 月 - 2018 年 03 月 (1 年度目)

4. 研究目的

「生きもの」にとって「生きる」とはいったいどういう営みなのだろうか。その形態、技術、境界に着目しながら従来の人文科学からの脱皮を目指すことが本研究の課題である。ドイツの生物学者ヤーコブ・フォン・ユクスキュルは、生きものの営みと、その営みがなされる世界との相互関係を「環世界 Umwelt」と呼んだ。この言葉が自然科学ばかりでなく、人文科学においても多大なる影響を及ぼしてきたことは周知のところである。ヴァイツゼッカーの『ゲシュタルトクライス』やその紹介者でもある木村敏の一連の仕事はもちろん、歴史学における環境史の活性化にも、人間と非人間の関係性を主題とする人類学的理論の深化や、近年の哲学等における「動物論」の隆盛にも、そのことは容易にみとられる。人間と人間以外の「生」の営みを同じパースペクティブで論じることを、先行者たちは試みてきたのである。本研究班でも、こうした先行研究を引き継ぎつつ、しかし「環世界」を単なる抽象概念として扱うのではなく、生きもののあり方、生きもの相互の「あいだ」や「空気」、さらにはそれらの関係のなかで生まれる技術や言説など、具体的な事象に寄り添いながら考えることを主眼に据えている。その射程は、たとえば多種多様な「生きもの」が関係する災害、開発、農林漁業、鉱業のみならず、心的生や精神病理学的事象にまで及ぶ。それは無文字の知もあわせて、「生きもの」としての人間が培ってきた生き抜くための知＝「人間力」を理解することにもなる。近年の人間と自然をめぐるさまざまな齟齬や葛藤は、これまでの自然科学や人文・社会科学では捉えきれないダイナミズムを有している。それは、総合的な知の営みであったはずの人文科学それ自体の限界を示しているともいえる。人間を、人間そのものとしてだけではなく、その境界や「界面」から捉え直すことが、かえってより深く人間を理解することにつながるのではないか。本研究の根底にあるのはそのような問いかけである。

By focusing on the lives, skills, interactions, and boundaries of humans and nonhuman beings, this research explores a new field in humanities. Jakob von Uexküll, a German biologist, has put forth the idea of Umwelt, which denotes the unique and entwined relationship between a creature and its environment. This notion presents a novel perspective by which to pluralize the ‘natural worlds’ of creatures, thus criticizing the anthropocentric idea of a sole ‘world’. The notion of Umwelt has provoked broad arguments in both the natural and the human sciences. The influence of Uexküll’s work can be found, for instance, in Viktor von Weizsäcker’s influential book *Der Gestaltkreis* and also in the work of Bin Kimura. Moreover, since the 1990s, we find an interesting common trend in various fields of the humanities: studies of the environment are flourishing in history; new approaches to human-nonhuman relations are developing in anthropology; and inquiries into human-animal relations and ethology are evident in philosophy. This development shows that the humanities have now broadened their reach beyond anthropocentrism and have expounded new perspectives to explore the lives and lived worlds of both human and nonhuman beings. This research project, based on both philosophical arguments and concrete case studies, investigates the comprehensive issues concerning life and Umwelten. The project deals with various critical topics, such as agriculture, natural and man-made disasters, mining developments, religious practices, illness and care, and scientific technology. Through a thorough investigation of the lives of and interactions between human and nonhuman beings, as well as of their unique Umwelten, this project seeks to understand the ‘worlding’ of human beings as a part of life on the planet.

5. 本年度の研究実施状況

初年度である本年度は、班長（大浦）と副班長（藤原・石井）による本共同研究の趣旨説明のあと、ユクスキュル、木村敏、ヴァイツゼッカーらの基本文献の会読と、所内外の班員やゲストによる動物論、生業論、科学技術論等にかんする自由発表という形で研究会を催した。なお、このうち数回は「現代／世界」班との合同開催とした。

7. 本年度の研究実施内容

2015-04-20

共同研究「環世界の人文学——生きもの・なりわい・わざ」の趣旨説明 発表者 大浦康介
発表者 石井美保 発表者 藤原辰史

2015-05-18

ユクスキュル／クリサート『動物と人間の環世界への散歩——見えない世界の絵本』を読む
発表者 藤原辰史

2015-06-01

木村敏『あいだ』他を読む 発表者 大浦康介

2015-06-15

ヴァイツゼッカー『ゲシュタルトクライス』を読む 発表者 石井美保

2015-07-18 (「現代／世界」班と共催)

日本近世における複合生業——近世の中国山地から現代社会を考える 発表者 岩城卓二
レールに身体を横たえて——鉄道自殺の技術論 発表者 瀬戸口明久

2015-10-05

モンテーニュ、デカルトの動物論とパスカル 発表者 山上浩嗣 大阪大学

2015-10-19

アガンベン・ナウ——『開かれ』を中心に 発表者 岡田温司 人間・環境学研究科

2015-10-24 (「現代／世界」班と共催)

「世界」の始まりと終わり：「作者とは何か」(フーコー)と「万物の終わり」(カント)から現代世界を考える 発表者 佐藤淳二 北海道大学

2015-11-02

『動物の境界』へ向けての長い助走——内世界・同伴・敵対・進化など 発表者 菅原和孝
人間・環境学研究科 (名誉教授)

2015-12-07

The Umwelten of Infrastructure: A Stroll along (and inside) Phnom Penh's Sewage Pipes
発表者 Casper Jensen 人文研・外国人研究員

2016-02-15

自然・神霊・人工物のアッサンブラージュ：「近代批判」としての呪術論を超えて 発表者
石井美保

2016-02-29

10. 共同利用・共同研究の参加状況

区分	機 関 数	参加人数				延べ人数			
		総計	外 国 人	大 学 院 生	若 手 研 究 者	総計	外 国 人	大 学 院 生	若 手 研 究 者
所内	1	16 (5)	2 (1)		2 (1)	120 (35)	20 (10)		20 (5)
学内(法人内)	1	18 (10)	2 (2)	15 (10)	15 (10)	60 (20)	10 (10)	30 (20)	15 (10)
国立大学	6	7 (1)				45 (3)			
公立大学	1	1				10			
私立大学	5	7 (2)			1 (1)	50 (10)			5 (5)
大学共同利用機関法人	1	1				3			
独立行政法人等公的研究機関	1	1				10			
民間機関									
外国機関	1	1	1			3	3		
その他	1	2				2			
計	18	54 (18)	5 (3)	15 (10)	18 (12)	303 (68)	33 (20)	30 (20)	40 (20)

※ () 内には、女性数を記載

11. 本年度 共同利用・共同研究を活用して発表された論文数

参加研究者がファーストオーサーであるものを対象

総論文数	14(2)
国際学術誌に掲載された論文数	5(0)

※ () 内には、拠点外の研究者による成果 (内数) を記載

インパクトファクターを用いることが適当ではない分野等の場合

理由			
掲載雑誌	掲載論文数	主なもの	
		論文名	発表者名
Ethnos: Journal of Anthropology 81(2)	1	Caring for Divine Infrastructures: Nature and Spirits in a Special Economic Zone in India.	Miho Ishii
NatureCulture 3	1	The Ecology of Transaction: Dividual Persons, Spirits, and Machinery in a Special Economic Zone in South India.	Miho Ishii
Asian Ethnology 74(1)	1	Wild Sacredness and the Poiesis of Transactional Networks: Relational Divinity and Spirit Possession in the Būta Ritual of South India.	Miho Ishii
Japan Forum 28(1)	1	Insularity and Imperialism: The Borders of the World in the Japanese and Taiwanese Kokugo Readers during the Taishō Era	Irina Holca
Analele Facultatii de Limbi si Literaturi Straine 1	1	『桜の実の熟する時』の読まれ方—大正前期の文芸投稿雑誌の言説を視座にして—	Irina Holca
現代思想 44(3)	1	積み木の響き (下)	藤原辰史
現代思想 44(1)	1	積み木の響き (中)	藤原辰史
現代思想 43(18)	1	積み木の響き (上)	藤原辰史
歴史学研究 増刊号 (937)	1	帝国日本のエコロジカル・インペリアリズム	藤原辰史
現代思想 43(12)	1	漬物と戦争	藤原辰史
現代思想 43(10)	1	人工の都市／匿名の都市	<u>篠原雅武</u>
社会人類学年報 41	1	国家と市場の人類学に向けて：経済人類学を再政治化するための試論	<u>松村圭一郎</u>

※拠点外の研究者については、発表者名にアンダーラインを付す

13. 次年度の研究実施計画

2年目の本年度は、所内外の班員やゲストによる研究発表という形で13回程度の研究会を予定している。テーマは、精神分析、科学思想史、南方熊楠論、動物論など多岐にわたる。また12月にはミニシンポジウムを予定している。

14. 次年度の経費

国内旅費	研究会参加費	開催回数 13 回 国内出張旅費 (延べ 130 人)	支出予定額 (400,000 円)
	一般旅費	国内出張旅費 (延べ 人)	支出予定額 (円)
海外旅費	渡航旅費	海外出張旅費 (延べ 人)	支出予定額 (円)
	招聘旅費	招待人数 (延べ 0 人)	支出予定額 (円)
謝金 (講演謝金、研究協力謝金、その他の謝金)			支出予定額 (100,000 円)
消耗品等経費			支出予定額 (円)
その他			支出予定額 (円)
合計			500,000 円

15. 研究成果公表計画および今後の展開等

本共同研究は班長の任期の都合上、例外的に2年間をもって一応の区切りとしているため、紙媒体での研究成果公表は計画していない。本年12月のミニシンポをもって研究成果の公表に代えたい。この二年の共同研究を「助走期間」として、別の班長による新たな研究班の発足を期待したい。